

## (2) 輸送方法

捕獲個体は移動元の確認地点においてポリビン等の容器で一時的に保管し、徒歩及び車両により移動先に輸送する。

輸送時間は1時間程度を想定する。ただし、移動対象種を容器内に保管する時間としては、輸送時間の他に、捕獲作業の待機時間(4時間程度)が想定される。

なお、捕獲個体が弱らないよう、以下の点に留意し捕獲当日中に移動先への放逐を完了させることとする。

- ・容器内に過密に捕獲個体を入れない。
- ・オキナワヤマタカマイマイ等の湿潤環境に生息する陸産貝類等に関しては保管時の湿度管理に留意し、適宜霧吹き等で湿度を確保する。
- ・イボイモリ幼生やトンボ目幼虫等の水生生物に関しては、エアレーションを行い十分な溶存酸素を確保する。
- ・容器内の気温や水温の急激な上昇を避けるため、容器の通気性の確保や水を定期的に入れ替える、容器を日陰に置く等の対応を行う。

### (3) 放逐方法

捕獲位置に応じて選定される各移動先において各移動対象種の生息基盤へと個体を放逐する。移動対象種の生息場所や生活様式を踏まえ、表-3.4.2 に示すように放逐方法を整理した。

表-3.4.2 樹林性及び湿地性の対象種の放逐方法

種名	放逐方法	備考
イボイモリ	成体: 転石・倒木下等に放逐 幼生: 止水～緩流水に放流 卵: 水域脇落葉下に放逐	
オキナワキノボリトカゲ	生息基盤である樹木枝先等に放逐	
アマミタカチホヘビ	転石・倒木下等に放逐	
オニヤンマ	水域の河床に放流	
オキナワサラサヤンマ	毛管帯の落葉下等に放逐	
リュウキュウトンボ	水域の河床に放流	
ヒメズカマキリ	水域の草間に放流	
コウトウコガシラミズムシ	水域の草間に放流	
ヒメフチトリゲンゴロウ	水域に放流	
リュウキュウオオイチモンジシマゲンゴロウ	水域に放流	
リュウキュウモウセンハナカミキリ	生息基盤である樹木枝先等に放逐	
オオシマミドリカミキリ	生息基盤である樹木枝先等に放逐	
フタオチョウ	枝葉などの生息基盤ごとくりつけ	
ヤママユ沖縄亜種	枝葉などの生息基盤ごとくりつけ	
クニガミスゲドクガ	生息基盤である密生草地へ放逐	
キノボリトタテグモ	生息基盤である大径木樹皮に放逐	
リュウキュウゴマガイ	生息基盤である落葉下等に放逐	
ノミガイ	生息基盤ごと放逐	過密に留意し、 移動先内で分散
サカヅキノミギセル	生息基盤である落葉下等に放逐	
オキナワヤマタカマイマイ	生息基盤である落葉下等に放逐	
ウロコケマイマイ	生息基盤である落葉下等に放逐	
トウガタホソマイマイ	生息基盤であるクワズイモ等に放逐	

### 3.4.2 海岸性の対象種

#### (1) 捕獲方法

捕獲は、改変区域の海岸部において手捕り及びベイトトラップ(餌を入れた容器を埋設し、個体を落ち込ませる)により行う。捕獲後は、速やかに種の判別、個体数の計数を行う。

#### (2) 輸送方法

捕獲個体は移動元の確認地点においてバケツ等の容器で一時的に保管し、移動先に徒歩及び車両により輸送する。

輸送時間は1時間程度を想定する。ただし、移動対象種を容器内に保管する時間としては、これらの輸送時間の他に、捕獲作業の待機時間(4時間程度)が想定される。

なお、捕獲個体が弱らないよう、以下の点に留意し捕獲当日中に移動先への放逐を完了させることとする。

- ・容器内に過密に捕獲個体を入れない。
- ・容器内の気温の急激な上昇や乾燥を避けるため、容器の通気性の確保や霧吹き等で水分を供給する、容器を日陰に置く等の対応を行う。

#### (3) 放逐方法

放逐前に、移動個体の確認が容易となるよう、マーキングが可能なものにマーキングを行う。



マーキングの例

各移動先において、浜後背地の樹林周辺に個体を放逐する。

現時点では移動先における宿貝の欠乏は考えられないものの、事後調査を継続する過程で必要と判断される場合は、宿貝の供給を行う。供給する宿貝は、オカヤドカリ類による利用頻度が最も高いアマオブネ類や、空き殻があまり存在しないもののオカヤドカリやムラサキオカヤドカリに利用されやすいサザエを想定する。

### 3.5 モニタリング調査計画

#### 3.5.1 調査の考え方

陸生動物の移動に係るモニタリング調査は、移動先における各移動対象種の生息状況を確認するとともに、樹林性及び湿地性の種については、移動先及びその周辺における生物相に大きな変化が生じていないかどうかを確認することを目的とする。

#### 3.5.2 調査地点

調査地点は、樹林性及び湿地性の対象種については移動先とした場所及びその周辺域と、改変区域に再進入した生息個体の確認、捕獲のために移動元とする。海岸性の対象種については、移動先及びその周辺を調査地点とする。

#### 3.5.3 調査方法

樹林性及び湿地性の対象種については、調査地点内を踏査し、陸生動物について目視、石・倒木下や樹中等の探索、タモ網を用いた任意採集及び昆虫類を対象としたトラップによる確認調査を実施する。

海岸性の対象種については、目視確認やバイトトラップ等による捕獲を行い、繁殖状況や移動経路を把握する。また、宿貝の欠乏状況を把握するため、移動の直前から、ペットボトルのふた等の人工物やアフリカマイマイ以外のマイマイ類の殻等オカヤドカリ類にとって好適でない殻を利用する個体の数を計数する。

#### 3.5.4 調査頻度・期間

樹林性及び湿地性の対象種については、以下のとおりとする。

- ・工事期間中は年度ごとに移動後年4回（4季）行う。
- ・供用後は3～5年程度行い、生息状況が安定したことを確認した後に終了する。

海岸性の対象種については、以下のとおりとする。

- ・工事期間中は繁殖期の夏季に4回程度（大潮時）行う。
- ・供用後は3～5年程度行い、生息状況が安定したことを確認した後に終了する。  
（繁殖期である夏季の大潮時に4回程度実施）

#### 3.5.5 調査結果の検討

樹林性及び湿地性の対象種については、移動先における移動対象種の顕著な減少の有無等を確認する。また、移動先の多様度の推移をもって、移動先の生物相の変化を把握する。

海岸性の対象種については、移動先におけるオカヤドカリ類・オカガニ類の個体数に減少傾向が認められるかどうか等を確認する。